“A Good Man Is Hard to Find” 論

——不条理の超克——

山　口　　格

（受付　1998年10月15日）

I

Flannery O'Connor が短篇 “A Good Man Is Hard to Find”（1953）を発表してから既に40年以上が経っている。この作品は彼女の短篇のなかでも代表作とされ，多くのテキストにも収録され，よく読まれてきた。それだけにしばしば批評の俎上にのせられ，神学的な解釈からポスト構造主義的な批評に至るまで様々な角度から分析がなされてきて，もはや新たな分析の余地無しといった感がある。しかしそれにもかかわらず，この作品は何度読んでも，それが提示している問題や疑問が何ひとつ片付いたという気がしない。ある批評家が言うように，この物語に対して徹底した合理的な分析を行うことは不可能なのかもしれないと思えるほどである。読後にそうした気分に襲われるのは，この物語が描いているところの，ある一家が謂われなくして皆殺しにされる惨劇のありさまからくる後味の悪さもさることながら，物語の最後で脱獄囚 The Misfit が呟く “It's no real pleasure in life.”[1] という，底知れぬ虚無の闇を感じさせる言葉が，我々の内奥で暗く重く反響し続けるからである。そしてその反響によってこの物語における O'Connor の主意が判然としなくなってくるのである。

1）Flannery O'Connor, *A Good Man Is Hard to Find and Other Stories*（New York: Harcourt, Brace and Company, 1955), p. 29.　以降，テクストからの引用はこの版による。

II

物語の前半は，自動車旅行中の一家のたわいもなさそうな様子が描かれており，後半では，彼らが自動車の転落事故を起こした現場に，二人の手下を従えた The Misfit が通りかかり，両者の出会いによって息詰まるほどの恐怖に満ちた極限状況が展開される。一家は The Misfit たちに救出されるどころか，主人の Bailey と子供の John Wesley を手始めとして次々とメンバーが殺害されていき，ついには Bailey の母親[2] が一人きりになって The Misfit と対峙することになる。そして最終的に彼女も The Misfit の手によって殺害されるという救いのない結末を迎えることになるが，先ほどの The Misfit が虚無的な言葉を吐く少し前，即ち祖母が彼に撃ち殺される直前には，極めて印象的な場面が描かれている。

> She saw the man's face twisted close to her own as if he were going to cry and she murmured, "Why you're one of my babies.　You're one of my own children!"　She reached out and touched him on the shoulder. (p. 29)

祖母のこの言葉と行為は，凶悪な犯罪者である The Misfit との対峙において戦き続けるそれまでの彼女の姿からは想像もつかないほどのものであり，いかにも唐突でその意味するところも不可解なため，恐怖による錯乱と思えなくもない。しかしこの直後に撃ち殺された彼女の，血溜まりの中に脚を十字に組み，顔には微笑を浮かべて死んでいる姿には神性のごときものが周到に表出されていることを斟酌すれば，土壇場での祖母のあの不可解と見える言動は，実は彼女の中に何らかの認識の覚醒が起こったことによるものであることが意図されていると考えなければならない。

---

2)　物語中では終始 "the grandmother" と呼ばれており，名前は言及されない。以降「祖母」と記すことにする。

そうした認識の覚醒のごときものが起こったとしても，結果的に祖母は The Misfit に殺害されるわけであるが，作者 O'Connor 自身は，祖母は「或る特別な勝利」を獲得するのだと意味深長な発言をしている。

> It is true that the old lady is a hypocritical old soul; her wits are no match for the Misfit's, nor is her capacity for grace equal to his; yet I think the unprejudiced reader will feel that the Grandmother has a special kind of triumph in this story which instinctively we do not allow to someone altogether bad.[3)]

しかし残念ながら祖母のあの覚醒的な瞬間の訪れもその時の言動内容もいかにも非合理的であるだけに，O'Connor の言う「或る特別な勝利」なるものを果たして本当に祖母が獲得しているのかという疑問が生じる上に，そもそもその勝利とは一体何を意味するのかが俄には見えてこない。それによしんば彼女がそれを獲得していることが暗示されているとしても，この物語が我々にカタルシスを与えないのは，他ならぬ The Misfit のあの "It's no real pleasure in life." という呟きによって結末が暗く閉じられているという事実によってである。つまり我々の内部で，極限状況において祖母に顕現しているらしい神性と思しきものによる漠とした感動を，The Misfit の言葉の虚無の響きの強さがはるかに凌駕してしまうのである。直前まで祖母の宗教的な合一感の崇高さにあると思われた主題が，かくして再び見えなくなるのである。

ところで祖母殺害直後の，The Misfit の "It's no real pleasure in life." という呟きは，もう少し詳しく示せば，手下の一人である Bobby Lee との次のような会話の中で発せられている。

> "She was a talker, wasn't she?" Bobby Lee said, sliding down the ditch with a yodel.

3) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners*, ed. Sally and Robert Fitzgerald (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1969), p. 111.

"She would of been a good woman," The Misfit said, "if it had been somebody there to shoot her every minute of her life."

"Some fun!" Bobby Lee said.

"Shut up, Bobby Lee," The Misfit said. "It's no real pleasure in life." (p. 29)

祖母がおしゃべりな人間であったという Bobby Lee の指摘を肯うかのように，The Misfit は祖母の軽薄な生き方を間接的に揶揄する。しかしその揶揄を聴いて "Some fun!" と調子のよい言葉を発する Bobby Lee を The Misfit が「黙れ」と制するとき，そこには，内実のない言葉を過剰なほど発していた祖母の姿，死という制裁をもってしても矯正し難いと彼が暗に言うほどの欺瞞的な生の有様が，実は人々の間に遍在していることが仄めかされているのではないかと思われるのである。だとすれば The Misfit の最後の呟きはそうした欺瞞的な生の遍在に対する絶望感が表出されたものと考えることができよう。

Ⅲ

虚無の重い響きが祖母の覚醒の一瞬の神々しさをかき消すこうした結末の閉じ方は，"A Good Man Is Hard to Find" における作者の捉え難い真意の在処を求める我々の意識を，メビウスの帯のように円環的に物語の冒頭へと繰り返し回帰させる。しかしその繰り返しのなかで，一見したところ，ごく平凡な人間たちと全く異質で反社会的な人間との対比であるかに見える物語の表層の下から，両者の類似性や共通性が立ち現れてくる。

祖母に対する Bobby Lee の「おしゃべりな女」という批判とそれに続く The Misfit の言葉は，身勝手な祖母に悩まされる Bailey やその子供たちが口にしてももっともだと思われるものである。具体的に見れば，"She would of been a good woman if it had been somebody there to shoot her every minute of her life." という The Misfit の祖母に対する憤怒に満ちた揶揄は，多弁さで人を操ろうとする祖母に対して頑なに不機嫌な沈黙

を続ける Bailey の中に抑圧されているであろう彼女への怒りの表出として，Bailey が用いても全く不自然でない表現である。また，The Misfit の最後の言葉，"It's no real pleasure in life." にしても，冒頭から鬱屈した態度で，家庭のなかに何ら喜びを見出しているふうでもない Bailey が，ふと呟いてもおかしくはない言葉である。祖母が事故直後にやってきた The Misfit の正体に気づいて，うっかり "You're The Misfit!" (p. 22) と叫んでしまうとき，Bailey は祖母が泣き出すほど強い言葉を彼女に投げかけるが，これとても，The Misfit が最後の場面で無神経に自分に触れてきた祖母を撃ち殺すという事実と，言葉と行動の違いこそあれ，祖母の軽薄さに対して強い怒りが表現されているという点では共通している。

The Misfit が部下に Bailey と John Wesley を森の中に連れて行けと命じると，Bailey は，"Listen...we're in a terrible predicament! Nobody realizes what this is." (p. 23) と必死になって訴えかける。これは The Misfit の心境と殆ど同じであると言える。さらには全ての人間が置かれている状況を O'Connor が，極限状況にいる Bailey に代弁させているとも言える。結末における祖母の "Why you're one of my babies. You're one of my own children!" という呟きに先行して人間の状況が暗示されているようである。そう考えれば，無口な Bailey の中に鬱屈，鬱積していたものは The Misfit の抱える苦悩と同質であり，The Misfit による祖母殺しは，同時に Bailey による祖母への憎悪を表象するものであるとも考えられる。そうだとすれば祖母のあの最期の言葉は文字通りの意味を持ち，同時に深く複雑な意味を持っていることにもなる。端的に言えば，祖母と The Misfit の関係あるいは会話は，祖母と Bailey の間で本来成立すべきであった関係あるいは会話が転移したものとして描かれているとも言える。

こうした類似性や共通性を考えると，Frederick Asals のように，"A Good Man Is Hard to Find" の後半を占める祖母と The Misfit の邂逅と対峙は，前半の祖母と一家の間のたわいもなく見える諍いが拡大深化したも

のであると見ることもできよう[4)]。そうした見方に立つと我々は徐々に，自動車事故を境とする物語の前半と後半の瞭然とした明暗のコントラストにも関わらず，実は両者が同じ一つの現代的な世界を現出していることに思い至ることになるのである。

後半のクライマックスの描かれ方が我々の意識を円環的に物語の冒頭に回帰させる原因は他にもある。批評家の中の何人かは，"...the grandmother...half sat and half lay in a puddle of blood with her legs crossed under her like a child's..."（p. 29）という祖母の死の姿に言及して，祖母は最後には子供のような "innocence" の状態になったとしているが，たとえそうだとしても，否，そう解釈したくなるからこそ，物語の冒頭の子供たちの姿に我々の意識は回帰して行かざるを得ないのである。"innocence" という状態とはおよそかけ離れた John Wesley や June Star のような子供を，この "like a child's" が喚起するイメージの上で想定してはならず，子供というものの本来的な姿，あるいは我々が子供に理想として期待するイメージを想起すべきなのであろうが，しかし物語の冒頭で祖母に対してこのうえない憎まれ口をたたくところに早くも示されているような，残酷でエゴイスティックな John Wesley や June Star の姿は子供の姿として本質的でないとどうして言えようか。このような概念の多様化もまた，結末のカタルシスを留保させているのであり，この物語が提示する現代社会の底知れぬ恐さに繋がっているのである。

現代社会の特性は，登場人物たちの名前という最も単純なものの中にすら見出される。"A Good Man Is Hard to Find" では登場人物が匿名であったり，あるいは逆に常時フルネームに近い形で言及されたり，祖母や The Misfit のように固有名詞でなかったりするが，このことは個人の社会的属性

4) Frederick Asals, *Flannery O'Connor: The Imagination of Extremity*（Athens: University of Georgia Press, 1982), p. 153.

The encounter between the grandmother and The Misfit that occupies the second half of "A Good Man" is thus in one sense an extension and deepening of the more sporadic and superficial battle between the old lady and her family in the first half.

の曖昧さを強調するためであると考えられる。とりわけ Bailey 一家は個人の社会的な属性が希薄化した現代の家族の有様を代表しているように思われる。Bailey や彼の妻の異常なまでの口数の少なさや行動の不活発さ，さらには Bailey の職業が明示されていないことなど，そのことを象徴的に物語っている。物語のなかでこの妻には名前が与えられていないが，それは現代の大衆社会において社会的な属性を喪失しつつある個人の無名性を想起させる。一方，彼らとは対照的に多弁で活動的な二人の子供には明確な個人像が見られると言わんばかりに，常に二人の名前はフルネームに近い形—John Wesley と June Star —で示される。しかし彼らの言動は内実をともなった個性の表出というにはほど遠く，エゴがむき出しになっているに過ぎないことは明らかである。従ってこの一家の姿には現代の共同体が孕んでいる脆弱さを容易に読み取ることができるのである。

Ⅳ

物語の冒頭に描かれている Bailey 一家の家の中の場面は，一見平和な様子と受け取られなくもないが，実はそれは息がつまるほどの閉塞のイメージ，しかも二重の閉塞のイメージを伝えている[5)]。テーブルで新聞を読んでいる Bailey は，旅行先の変更を熱心に訴える祖母に対して一言も返答をしないどころか，"Bailey didn't look up from his reading..." (p. 9) と，視線を上げようともしない。John Wesley と並んで床で漫画を読んでいる June Star も，""She wouldn't stay at home to be queen for a day," June Star said without raising her yellow head." (p. 10) と，祖母の心理を見透かした侮蔑的な言葉を発しつつ，やはり顔を上げようとしない。ソファに座って赤ん

5) Carter Martin がこの物語における閉塞のイメージを詳しく分析しているが，Bailey 一家の家や自動車，Red Sammy の店などの物理的空間が喚起する閉塞のイメージの分析に留まっている。
Carter Martin, ""The Meanest of Them Sparkled": Beauty and Landscape in Flannery O'Connor's Fiction." Flannery O'Connor, *A Good Man Is Hard to Find*, ed. Frederick Asals (New Brunswick: Rutgers University Press, 1993), pp. 133–135.

坊に食物を与えている Bailey の妻も，祖母に対して無反応で無言のままである。では祖母以外の者同士の意思疎通は図られているかといえば，これまた殆ど皆無である。家族でありながら個々の構成員が自己の中に退行しているのである。本来濃密な人間の絆が成立するはずの家庭という閉じられた空間の中で，お互いが自己の中に退行して自己を閉塞しているというアイロニカルな状況がここにはある。

翌日彼らはフロリダに休暇旅行に自動車で出かけるが，家よりもはるかに相互の近接度の高い自動車という閉じられた空間の中でも，個が閉塞されている状況は続く。祖母が感動する車外の景色に子供たちは大して目もくれず漫画を読み続けるという事実に代表されるように，祖母以外誰も外の世界に関心を払おうとしない。無論そこで重要なことは，自分を取り囲む外界へ目を向けその意味を考えようとしない彼らの性向を O'Connor が象徴的に描いているということである。彼ら一家が旅行の途中で食事に立ち寄る Red Sammy の店での，Red Sammy の妻と June Star のやり取りの場面は個の閉塞状況を最も明瞭に示している。

> "Ain't she cute?" Red Sam's wife said, leaning over the counter. "Would you like to come be my little girl?"
>
> "No I certainly wouldn't," June Star said. "I wouldn't live in a broken-down place like this for a million bucks!" and she ran back to the table.
>
> "Ain't she cute?" the woman repeated, stretching her mouth politely.
>
> "Arn't you ashamed?" hissed the grandmother. (pp. 14–15)

他者からの善意に満ちた接近を，非礼を通り越した強烈な侮蔑をもって拒絶し，自己の側の世界へと「駆け戻る」。このように "A Good Man Is Hard to Find" では，個への退行によって相互の分離を深めている現代の人間の存在状況が倫理的秩序を喪失した世界を生み出していることが執拗に暗示されているわけであるが，その意図は，自己閉塞に対する懲罰であるかのごとき一家の自動車転落事故をきっかけとして，道路脇の溝という閉塞空

間において展開する恐怖の世界で明らかとなる。

分離，距離，自己の殻への閉じこもりを強く感じさせる Bailey 一家は，上のような June Star の言動を恥と捉えるだけの倫理観は持っている祖母によってかろうじて繋ぎ留められているかのように思える。しかし実は一家の中でとりわけ自己の殻に執着し欺瞞的であるのは，他ならぬ祖母自身である。独りよがりな理屈で自分の猫をこっそり旅に連れてきたり，旅行の途中で見かけた貧しい黒人少年の姿を単なる絵画的な風景として眺めたり，子供たちを惹きつけるために捏造した思い出話に基づいて旅行のコースを変更させたり，その身勝手で偽善的で無神経な言動は際立っている。祖母の最大の問題は，そうした自分自身を省みることがないままであるということ，つまり外界や他者との関わりのなかでの自己に対する認識が欠如している状態にあるということである。彼女は外界や他者に対して関心や配慮を向けはする。しかしそれらが極めて皮相的かつ形式的で，結局は自己愛的なものであることは，The Misfit との対話における自己の延命のための方便に俟つまでもなく，例えば，旅への出発時点での彼女の服装に対する配慮に既に表れている。一家の他の者は軽装をしているのに対し，祖母は単なる自動車旅行に到底相応しいとは思えぬ盛装をしているが，それはもっぱら，"In case of an accident, anyone seeing her dead on the highway would know at once that she was a lady."（p. 11）というナルシスティックな動機によるものである。

さらに祖母の問題が，郷愁によって過去に対する自分の認識が歪められているにも関わらず，むしろそれに固着することにもあることは，多くの批評家が指摘する通りである[6)]。彼女の過去に対する歪んだ認識とそれへの固着は結果的に重大な事態を招くことになる。彼女は子供たちに昔訪れたことのある古いプランテーションの屋敷の話をするが，そこに立ち寄りたいという自分の願望を達成するために子供たちを自分の側に惹きつけるべ

6) e. g. John F. Desmond, *Risen Sons: Flannery O'Connor's Vision of History* (Athens and London: The University of Georgia Press, 1987), p. 30.

く，屋敷内に秘密の羽目板があり，その奥に銀器が隠されていると，話を一部捏造する。その捏造に加えて，彼女は件のプランテーションのある場所についてすっかり記憶違いをしている。結果的にはこの記憶違いが一家の惨劇の原因となる。祖母は Red Sammy の店で，今の世の中は "A good man is hard to find."（p. 16）だと嘆く Red Sammy に，"People are certainly not nice like they used to be."（p. 15）と同調し，過去の「良き時代」を語り合う。先ほどの捏造が，""There was a secret panel in this house," she said craftily, not telling the truth but wishing that she were..."（pp. 16–17）と，かくあれかしという願望の発露であることに加えて，記憶違いについて事故の直前までそれと気づかぬ全くの無自覚は，昔は良かった，善人が多かったという記憶そのものの信憑性すら疑わせる。

祖母に見出される以上のような問題に満ちた性格や言動が，一家の運命を暗転させる原因になるために，"A Good Man Is Hard to Find" が論じられる際に，祖母の責任論が展開されることが多い。しかし，出来事というものが純粋にある人間の単独の行為によってのみ生起し得るものではないこと，即ちそれが共時的通時的に少なくとも周囲の人間や事象と複雑に絡み合って成立するものであるという，あまりにも自明の理を考えるだけでも祖母一人に事故の責任を問うことは意味がない。祖母のエゴイズムという殻の中への閉塞が指弾されるならば，Bailey や子供たちの同種の閉塞も等しく指弾されなければならないことは言うまでもない。

V

責任論よりもはるかに重要だと思われるのは，"A Good Man Is Hard to Find" が人間の自己閉塞の事例に満ちているだけでなく，将来発生する事象の常識的な予測が裏切られたり不可能であったりする，いわば世界の不条理を示す事例も次々に示されているという事実である。そしてその不条理は必然的に人々の無力さを表すことになる。物語全体がこの無力さの雰囲気に支配されており，この物語における O'Connor の意図は，不条理の世

界における人間の無力の提示にあるのではないかと思えるほどである。

不条理とそれに対する人間の無力の表象は，冒頭から様々な場面において容易に看取される。留守中に猫がガスバーナーに体をこすりつけて誤って窒息死してはいけないからと，祖母は猫をこっそりバスケットに隠して旅行に連れていくが，そのことが一家の運命を決する事故の直接的な原因になることなど想像もつかない。また，祖母は旅行の出発前に自動車の走行距離を書き留めておくが，彼女がそうするのは "...it would be interesting to say how many miles they had been when they got back." (p. 10) という理由からである。これは家に無事に帰還することを当然のこととして無意識に前提しているが，結果的には彼らは帰還できなくなる。Red Sammy の店でジュークボックスの音楽に合わせて June Star がタップダンスを踊るのを見て，「可愛い」と Red Sammy の妻が彼女に声をかけるが，全く予想外にも June Star からは悪口雑言という反応が返ってくる。

不条理とそれに対する人間の無力の表象は，次の二つの場面で最も明瞭な形を取っている。祖母は車中で子供たちを楽しませるために自分が若かった頃のエピソードを語る。彼女の留守中に求婚者 Mr. Edgar Atkins Teagarden が彼女へのプレゼントとして，自分のイニシャル "E. A. T." を彫って玄関先に置いていった西瓜が，たまたまそれを見つけた黒人少年に食べられてしまうという内容であり，その後 Mr. Teagarden は大金持ちになり，祖母は彼と結婚すべきであったと後悔したという蛇足の話までついている。このエピソードは明るくユーモアを交えて語られているものの，そこには人の期待と予測を裏切る測りしれないものの深淵が覗いていることを象徴的に例示しようとする作者の意図が感じられる。その意図は Red Sammy が語る話にもはっきりと感じられる。Red Sammy は，自分の店に給油に来た若者たちがちゃんとした連中に見えたので，彼らにガソリン代をつけにしてやったが，結局踏み倒されることになったという経験を踏まえて，「まったくお手上げですよ…近頃は誰を信用していいものやら見当もつきません…それが実情じゃありませんかね」("You can't win...These days

you don't know who to trust...Ain't that the truth?" (p. 15)) と嘆く。その慨嘆は図らずも世界の不条理とそれに対する人間の無力さを集約的に言い表した表現となっている。

物語の前半から自動車事故までに描かれている登場人物たちの自己閉塞の姿は，実は自己の外側の認識対象の持つ複雑さや不可解さが生む不条理の意味を捉えきれないことの無力感から，自己愛的な価値観に支えられた明瞭で単純な自己の世界に逃走する姿なのである。この短篇の題名として採られている Red Sammy の "A good man is hard to find." という嘆きは，郷愁によって複雑さを削ぎ落としてわかりやすく内面化した過去を基準として，善と悪の単純な二元論でしか世界を捉えられず，またそれを懐疑することもない彼らの自己閉塞への逃走の姿を物語るものである。

Ⅵ

O'Connor は執拗に彼らの自己閉塞の世界を提示しておいた後で，物語の半ばでこれを打ち砕く仕掛けを用意している。一家の自動車転落事故が発生することをきっかけとして，それまでの一見平和で輪郭の明瞭な世界は俄に崩壊し，その意味が解体されるのである。事故現場に偶然通りかかった脱獄囚 The Misfit は祖母との対話の中で，魂の問題を抱えていることを明らかにするが，そのことは逆に祖母の自己閉塞の姿を照射することになる。彼女がクリスチャンでありながら魂の問題に向き合うことなく過ごしてきたことが，事故現場のあの何も覆い隠すもののない空間でさらけ出されるのである。

一家のメンバーが The Misfit の手下によって次々に殺されていく恐怖の極限状態のなかで，祖母は自己の延命のために The Misfit に対して様々なお世辞と懇願によって諂う。しかしそれらは彼に全く通用しない。人間が生きたまま焼かれるのを見たということに代表されるような世の不条理の経験と，自らが投獄されたことの不条理性が彼によって語られるとき，祖母はただ「祈りなさい」としか言うことができない。The Misfit と自称し

ているのは，自分が犯した罪と与えられた罰とが釣り合っていないからだといった話に典型的に表れているような不条理性の厳密な認識に対して，祖母の情緒的な反応はいかにも脆弱で的外れである。そして最終的に，「イエスが世界の均衡を崩したのだ」（"He [Jesus] thown everything off balance." (p. 28)）という不条理な世界に対する強烈な不信感があるがために，殺人をはじめとする犯罪行為に身を浸していることを The Misfit が論理的に告白するとき，それに返答する祖母は自分が何を言っているのかさえわからなくなり，頽れる。それは殺人の意思を直接耳にしたことによる恐怖のせいであるというよりも，至る所に見出されるはずの不条理という問題に無自覚なままで，自己の内奥に問いかけることなく，たかだか善人の減少を嘆く程度の浅薄な倫理観に粉飾された精神の意匠が，The Misfit の不条理に対する深い懐疑を前にして全く無力であるという恐ろしいほどの実感が彼女を痛打するからである。外界や他者の実相を理解することから逃走して自我のなかにひきこもっていたことが，ここにきて手ひどいしっぺ返しを喰うのである。

O'Connor は祖母の無力感が極限に達したこの直後に，祖母に次のような劇的な変化を生じさせている。

> She saw the man's face twisted close to her own as if he were going to cry and she murmured, "Why you're one of my babies. You're one of my own children!" She reached out and touched him on the shoulder. (p. 29)

この劇的な変化に O'Connor は何を託しているのだろうか。結論から言えば，祖母のこの驚愕すべき言動は，人と人との関わりの見えざる宿命，即ち他者との関わりの中でのみ人は自分自身でありうるのだということに覚醒したことを物語るものである。物語の冒頭で，祖母は家族旅行の目的地であるフロリダ方面に脱獄囚 The Misfit が向かったという記事が新聞に載っているのを見つけ，目的地の変更を Bailey に迫る。

> "Here this fellow that calls himself The Misfit is aloose from the Federal Pen and headed toward Florida and you read here what it says he did to these people. Just you read it. I wouldn't take my children in any direction with a criminal like that aloose in it. I couldn't answer to my conscience if I did." (p. 9)

祖母が Bailey に目的地の変更を迫るのは，実は親戚に会いにテネシーに行きたいという希望が彼女のなかにあるからなのだが，いずれにせよ The Misfit と出会わないこと，彼から離れていることを願っていることに違いはない。しかし旅の途中で事故をきっかけとして The Misfit に出会うことになり，当初の願望とは全く正反対に，最終的に彼の肩に触れるという行為に見られるように，彼女が彼との距離をゼロにまで詰めることになる。O'Connor は物語のそうした実にアイロニカルな展開の設定そのもののなかに，人間同士の見えざる繋がりや共存を象徴的に示そうとしたのだと言える。自分とは関わりがなく，社会正義に反する存在つまり「敵」としての他者との接触を回避することで自分の側の世界を安全に保ちたいとする祖母の願いは，社会通念上ごく常識的で合理的なものである。だが彼女の最期の言動は，正義とか常識とか合理とかいった社会的な判断基準を超えている。The Misfit から "my children" を遠ざけておくことを望んだ彼女が，最後の場面では「敵」としての他者である The Misfit 自身を "one of my children" と呼ぶ。また，物語の冒頭に，祖母の子供は Bailey という "the son she lived with, her only boy" (p. 9) だけだとさりげなく書かれていることも，実は結末の意味の重要性を際立たせる。この「わが子」をキーワードにして対極から対極へと飛躍する驚くべき展開によって，そこに人間の社会的価値の有無を超え，彼我の関係を超越して他者を全人格的に肯定し受容する超合理的とでもいうべき聖性が顕現していることを読者に伝えようと O'Connor が図っていることは明らかである。

The Misfit に対して投げかけられた "one of my children" という祖母の言葉においては，善人と悪人，自己と他者といった倫理的社会的価値基準に

基づく格付けや関係性が止揚され相対化されており，それはまさにそうした止揚や相対化を自らの生と死によって体現したイエスのイメージを喚起するものであり，そのイメージはこの言葉を呟いた直後の祖母の行為によって強められている。異教徒や社会から隔絶された者といった異次元にいる禁忌の存在にすら，イエスは「触れる」ことによって癒しを与えたが，それは相対立し葛藤する二つの世界の究極的統一を開示する象徴的な行為と解される。そのことを考えれば，社会秩序に背反する行為に身を浸している凶悪な犯罪者 The Misfit に手を差し伸ばして「触れる」という，社会秩序の側から見れば禁忌の侵犯ともいえる祖母の大胆な行為は，二つの相対立する世界の境界そのものの消滅を暗示するものとして，その意味がイエスの行為と重なり合うものである。

O'Connor が言う，最終的に祖母が獲得する「或る特別な勝利」とは，おそらくこうした止揚や相対化を通じた人間存在の本質に対する直観的認識が祖母のなかに生じたことを指すのであろう。The Misfit を "one of my children"「私の」「子供」「の一人」という言葉の各々に表れている自己責任と愛とその包括性に，無責任な言動や南部の婦人としての皮相な誇りや因習的な考え方あるいは自己愛に閉ざされたアイデンティティからの唐突かつ劇的な解放を見ることができる。人間存在の本質に対する直観的認識の，論理では説明のつかないこうした神秘的な訪れを，O'Connor は，"the action of grace in the Grandmother's soul" と表現し，いかにもキリスト教作家らしく，読者にはこの恩寵の働きに注目してもらいたいと言う[7]。なるほど祖母に注目すれば，恩寵の顕現した祖母の最後の言動は，あらゆるものを等しく嘉納する神の愛，無私のイエスの愛にも通ずる聖なる崇高さを持っており，その気高い聖性は，直後に The Misfit によって射殺されて死体となった彼女の，"...the grandmother...half sat and half lay in a puddle of blood with her legs crossed under her like a child's and her face smiling up at

7) O'Connor, *Mystery and Manners*, p. 113.

the cloudless sky."（p. 29）という姿にも色濃く漂っている。O'Connor は物語というものを機能させるものは何かという自問自答のなかで次のようなことを述べている。

> The action or gesture I'm talking about would have to be on the anagogical level, that is, the level which has to do with the Divine life and our participation in it. It would be a gesture that transcended any neat allegory that might have been intended or any pat moral categories a reader could make. It would be a gesture which somehow made contact with mystery.[8)]

彼女は，ある登場人物による，物語中の他のどれとも違うあるアクションによって，物語というものは機能するという考えに基づいて，そのアクションは聖書的なレヴェルで神秘と繋がる超越的なものでなければならないとしている。この説明に続けて O'Connor は，"A Good Man Is Hard to Find" におけるそうしたアクションは祖母の最期の言動であると述べ，もしそれを取り去ればこの物語は成立しないだろうとまで言い切って，その重要性を力説している。確かに祖母の最期に色濃く漂う崇高さを思えば，"A Good Man Is Hard to Find" という物語の核心はそこにあるのかもしれない。しかし，祖母のアクションの重要性を力説し，従って恩寵が顕現する彼女に注目すべきだと言う作者自身が，その祖母を The Misfit が射殺する設定にしているという事実は何を物語るのであろうか。

Ⅶ

祖母が手を伸ばして The Misfit に触れることは，祖母の側に立てば，彼女の覚醒的な認識による合一感の表れである。これを The Misfit としては，祖母が助命を求める目的でなした殆ど狂気じみた行為だと受け取るか，あ

8) O'Connor, *Mystery and Manners*, p. 111.

るいは本当に恩寵による覚醒が祖母に訪れたのだと感じたかいずれかである。しかしいずれにせよ，射殺という反応に表れているように，激烈な拒絶という結果になることに変わりはない。彼が祖母の行為を前者のように受け取ったのであれば，彼と違って世界の不条理を認識しない無感覚な俗物からのアプローチは唾棄すべきものであろうし，彼女の覚醒を認めたとしても，キリストの行為を非合理であるが故に強く懐疑する彼は，当然のことながら祖母に訪れた超自然的な恩寵を事実として受容できるはずはないであろう。

従って The Misfit は祖母の覚醒と死も意に介する様子もなく，物語の最後での "It's no real pleasure in life." と呟くのであるが，そうしてみるとやはり彼の魂は最後まで深い虚無の闇に閉ざされていると推察せざるを得ないように思える。だが閉塞状況のなかにいるということは，言うまでもなく人間的超越や開放の可能性自体が閉ざされているということを意味するわけではない。考えてみれば The Misfit がイエスの奇跡をいかに懐疑しようと，否定できないことがある。その懐疑においてイエスの存在自体は前提されているということである。彼にとっての問題は，イエスが死者を甦らせた現場に自分が居合わせなかったから信じることができないというものであり，また，イエスが全てのバランスを崩したと言っているのであって，イエスが存在したかしなかったかという疑問が全てのバランスを崩したと言っているわけではないのである。

The Misfit に恐怖してきたにもかかわらず，祖母はその最期において，銃を持つ The Misfit に無防備に手を差し伸ばし，彼に触れる。そして全く無抵抗のうちに撃ち殺されるが，彼女の死に顔は微笑を浮かべて雲一つない天を見上げている。この無力と聖性は，受難におけるイエスのそれを想起させる。イエスの弟子たちは，数々の奇蹟を行ってきたイエスが受難という現実において全く無力であることに失望落胆したが，結局彼らは心のなかからイエスを消すことが出来なかった。それは彼らの内奥で，イエスがなぜ受難において全く無力であったのかが問われ続けたからである。イエ

スの奇蹟を懐疑し，自らの生の不自由さをイエスのせいにする The Misfit は，祖母の死が語りかけている無力の意味を読み取ることができない。しかし O'Connor はある書簡のなかで次のように説明している。

> The Misfit is touched by the Grace that comes through the old lady when she recognizes him as her child, as she has been touched by the Grace that comes through him in his particular suffering. His shooting her is a recoil, a horror at her humanness, but after he has done it and cleaned his glasses, the Grace has worked in him and he pronounces his judgment: she would have been a good woman if *he* had been there every moment of her life.[9)]

The Misfit は自分が悩まされてきた世の不条理を超克する者の姿を自らの手で現出しながら，そしてそれを眼前にしながら，"She would of been a good woman...if it had been somebody there to shoot her every minute of her life."(p. 29) と，相変わらず二元論的な視点から脱却できないでいる。しかしながら，描かれ方としてはやや説得力に欠けるきらいはあるものの，この言葉の中において The Misfit が少なくとも生に対する無自覚への気づきを与える存在を認めていることと，人間のありうべき自己への甦生が逆説的に述べられていることを考えれば，O'Connor の言うように彼においても恩寵が作用していると言えるかもしれない[10)]。

---

9) Flannery O'Connor, *The Habit of Being: Letters of Flannery O'Connor*, ed. Sally Fitzgerald (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979), p. 389.

10) Claude Richard は The Misfit のこの言葉を次のように解釈しているが，"somebody there to shoot her" の象徴的意味を充分捉えていないために誤解に陥っているように思われる。
...he [The Misfit] says to Bobby Lee that only death (destiny) could teach this person [the grandmother] defined by desire the true meaning of the word *goodness*...
Claude Richard, "Flannery O'Connor and Narratology." Suzanne Morrow Paulson, *Flannery O'Connor: A Study of the Short Fiction* (Boston: Twayne Publishers, 1988), p. 218.

↗

イエスの弟子たちの内奥では，受難における無力なるイエスを見棄てたことへの悔恨とともに，彼の存在はますます大きくなっていった。彼の死が彼らを彼の無力の意味そのものについて考えこませることになり，彼らはその無力の背後にあるものに気づくに至った。裏返せば，いわばその気づきという恩寵が顕現するためにはイエスの無力なる死が必要だったのである。おそらく O'Connor はカトリック作家としてこのことを踏まえて，祖母の最期の覚醒と無力な死が今後の The Misfit の内面に与えるであろう気づきを確信している。O'Connor は物語の閉じられた先についてこう想像する。

> I prefer to think that, however unlikely this may seem, the old lady's gesture, like the mustard-seed, will grow to be a great crow-filled tree in the Misfit's heart, and will be enough of a pain to him there to turn him into the prophet he was meant to become. But that's another story.[11)]

"A Good Man Is Hard to Find" が The Misfit のあの虚無的な呟きで終わっている以上，なるほど彼の将来の姿の予測は別個の話であることは言うまでもない。しかし，イエスの死が結果として弟子たちに，その無力の意味について悔恨という苦痛の伴う思考を迫って彼らをイエスの愛への気づきに導いたように，The Misfit の魂に播かれた祖母の無力なる死という種子がやがて彼を苦悶させるほど成長し，ついには彼をして不条理を超克させる可能性は決して否定できない。なぜなら O'Connor は物語の展開にも結末にも巧妙にその可能性を示唆しているからである。

↘ これに対して Robert H. Brinkmeyer, Jr. はこの言葉の実存的奥行きを極めて的確に捉えている。

The Misfit's reply suggests the great power of challenge and pressure in opening up one's sensibility to a larger vision of things...

Robert H. Brinkmeyer, Jr., *The Art and Vision of Flannery O'Connor* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1989), p. 162.

11) O'Connor, *Mystery and Manners*, pp. 112–113.

この物語の大きなアイロニーは，皮相な信仰しか持たず独善的な過ごし方をしてきた祖母に恩寵が顕現し，しかもそれは，次々に人殺しをしていく凶悪な The Misfit との出会いがきっかけとなるということである。無内容で無力な祖母に啓示的な瞬間が訪れ，悪魔とも思えるほどの The Misfit が結果的に神の恩寵のエイジェントの役割を果たすというこの設定には，人間の生そのものが背理に満ちた実存であることを示そうとする作者の最大の狙いが隠されている。そうしてみると，“A Good Man Is Hard to Find” という題名でさえ，人倫の荒廃を表していると表面的に解釈するよりも，善人と悪人の区別など背理においては相対化されてしまう以上，殆ど意味を持たないということを暗に訴えていると解釈すべきなのではないかと俄に思えてくるのである。

The Misfit の “It's no real pleasure in life.” という最後の呟きは，彼が祖母を殺す前に言った “No pleasure but meanness.”（p. 28）という，喜びは悪の実践にあるのみとする言葉の繰り返しだとすれば，確かに虚無的な響きを持っている。しかしここでは “real” という語が付加されていることが微妙で決定的な違いを生んでいると思われる。脱獄することによって刑務所からの肉体的な解放を果たし，神と人間への不信の念から理不尽な悪の実践によって不条理を身をもって示すという，自らを社会規範の埒外に置いた自由な振る舞いをしていても，結局それによっては魂の「本当の」解放は得られないのだということの自覚を，彼の最後の呟きはよく表している[12)]。その自覚を生んだのはやはり祖母の死だと考えるしかない。「ばあさんはお

12）Miles Orvell は，“It's no real pleasure in life.” という The Misfit の最後の呟きに関して次のように主張する。

...there is perhaps the seed of a new dissatisfaction in those last words of his [The Misfit's], which deny what he had earlier affirmed（“No pleasure but meanness”）. Miles Orvell, *Flannery O'Connor: An Introduction* (Jackson and London: University Press of Mississippi, 1991), p. 134.

しかし “real” という語の付加が生み出している差違を考えれば，The Misfit が前言を否定しているわけではないことは歴然としている。

しゃべりだった」と非難してはしゃぐ Bobby Lee を The Misfit が「黙れ」と言って厳しく制するその真剣さは，単におしゃべりだったと片づけることで，祖母の最期の言葉すら内実のないものとしてかき消されてしまうことの恐れを感じさせる。おそらくこの時彼のなかで祖母の最期の言動の持つ意味が立ち上がってきているのである。

The Misfit はイエスを合理という知によって懐疑しているがために，祖母に顕現したような恩寵に対するヴィジョンを欠いている。合理を超えて作用する神聖な力を確信することができないのである。しかし，そもそも，"If He [Jesus] did what He said, then it's nothing for you to do but thow away everything and follow Him..." (p. 28) という彼自身の言葉に表れているように，イエスに対する彼の強い懐疑は，実は裏を返せばイエスを激しく憧憬する気持ちにほかならない。その激しい希求の意志が彼に祖母の最期の言動の聖性を感じ取らせないはずはない。従って "It's no real pleasure in life." という最後の呟きは，祖母の聖性によって一層触発されたパラドキシカルな意識の発露となっている。それは，全てを擲っても従っていきたいほどの聖なるものが自分に顕現しないことへの絶望と，それでもなお棄て去ることの出来ない聖なるものへの憧憬の狭間に自分が立っていることの自覚である。そうしてみると，虚無の意識に閉塞された彼の絶対的な孤独感によるものと思われていた，空には「太陽も雲も見えない」("Don't see no sun but don't see no cloud neither." (p. 23)) と彼が独り言のように繰り返し呟き，それを見上げるという行為は，実は，「神は悪人の上にも善人の上にも，陽を昇らせる」と聖書が教えるところの神の愛への密かな渇望とそれが自分には与えられないことの絶望とを同時に抱え込んだアンビヴァレントな苦悩によるものであるのかもしれない。

"real pleasure" がおそらくキリスト者にとっては "grace" と同義だとするならば，その行動において信仰とは無縁に見える The Misfit もまたキリスト者であり，真の信仰への道が開かれていることを O'Connor は最終局面で示唆しているようである。というのは，不自由な生をまるごと肯定する

ときに逆に魂の解放が得られるという背理，即ち不条理に対する合理的な懐疑からの脱出はこうした苦悩の自覚を基盤とするからである。

合理の知をもって懐疑する自己自身が，実は背理を抱え込んでいることにまず気づくことから不条理の超克は始まる。The Misfit の最後の呟きが，この世における人間の生に対する深い絶望と恩寵に対する激しい憧憬を同時に抱え込んだ背理そのものであることを示すことで，O'Connor は The Misfit を不条理の超克への出発点に立たせていると言えよう。なぜなら，カトリック作家として O'Connor が作品世界を創造するとき，その最大の関心事は，"...you must believe in order to understand, not understand in order to believe..."[13] との彼女自身の言葉に表れているような信仰の核心，即ち合理の知を超えて背理を受容することが信仰というものであるという覚醒に作中人物を導くことであったはずだからである。

Ⅷ

嘗てある批評家が O'Connor の芸術は非歴史的であると評した[14] が，短篇の代表作である "A Good Man Is Hard to Find" はまさにその典型と言えよう。発表されてから40年以上もの時の流れの中で，この物語が我々に与える衝撃力が弱まっているとか色褪せているとかいった印象を少しも受けない。O'Connor は祖母を通して信仰という魂の転機が背理的に訪れる神秘を描く一方で，不条理な世界を合理という知をもって理解把握しようとする人間の魂の転機が，まさにその合理の知によって阻まれていることを The Misfit の姿のなかに示している。その姿は，人間が本来他者との間に持っている神秘的な分有関係を直観することもなく，社会を規律する明確な倫理も失って，ただ前途に横たわる空漠たる無，あの太陽も雲も見えない空のよ

13）O'Connor, *The Habit of Being*, p. 370.

14）Alfred Kazin, *Bright Book of Life: American Novelists and Storytellers from Hemingway to Mailer* (Boston: Little, Brown and Company, 1971), p. 60.

うな虚無の世界に佇むしかない現代の人間の孤独の姿にそのまま重なる[15)]。物語中 Bailey が一家が陥った状況について "...we're in a terrible predicament! Nobody realizes what this is." と叫ぶが，この言葉は現代の砂漠化した精神状況とそれに対する無感覚に恐ろしいほどよく当てはまる。この圧倒的なリアリティが，実は "A Good Man Is Hard to Find" の陰鬱で重い読後感を生み出す真の要因であるのかもしれない。そのリアリティに気圧されるとき，この物語が最終的に訴えかけてくるものの意味は，40年以上もの歳月を越えてますますその重要度を増しているという気がしてならないのである。

15) この意味で Madison Jones の次のような捉え方は的確である。

In essence it ["A Good Man Is Hard to Find"] is a devastating sermon against the faithfulness of modern generations, man bereft of the spirit.

Madison Jones, "A Good Man's Predicament." *The Southern Review* 20 (1984), p. 841.

W. S. Marks, III も "A Good Man Is Hard to Find" を寓話と見ているが，人物の生命感のなさが欠点だと指摘する。

A graver deficiency or limitation of her [O'Connor's] work is that lifelessness of characterization that Hawthorne recognized as a frequent flaw in his own early productions.

W. S. Marks, III, "Advertisements for Grace: Flannery O'Connor's "A Good Man Is Hard to Find."" *Studies in Short Fiction* 4 (1966), p. 27.

しかし O'Connor が Jones の言う "man bereft of the spirit" を描くことで現代の人間存在の状況を提示しようとしたことを考えれば，生命感の欠如こそ，その状況における，内部に虚無を抱えた人間の性格づけとしてふさわしいと言える。

Summary

A Study of "A Good Man Is Hard to Find"
——The Transcendence of the Absurd Realities——

Itaru Yamaguchi

It is more than forty years since Flannery O'Connor published one of her best stories, "A Good Man Is Hard to Find," in 1953. Its plot is very simple: a family on vacation is killed by an escaped convict, but it presents much more than just the extermination of the whole family, which still causes much argument, in particular, as to what the mysterious ending of the story implies.

The grandmother of the family, who is bigoted in conventional and superficial morality, takes little recognition of the absurdity of the world. During the tense conflict with The Misfit, the convict, she reaches the recognition and acceptance of The Misfit as one of her children in an abrupt way. Just after that she is killed by him, but when O'Connor says that the grandmother has a special kind of triumph, this action of grace in the grandmother's soul reflects O'Connor's belief in the possibilities of human existence as a Catholic writer.

The Misfit, who has a violent indignation against the absurdity and doubts Jesus Christ's miraculous deeds, is lost between faith and disbelief. The fact that he kills the grandmother seems to represent his denial of God. By making him conclude that "it's no real pleasure in life," however, O'Connor implies that behind the nihilistic confession lies his desire for grace. The Misfit finally stands for the entire human race unaware of the paradoxical way of human existence.

In "A Good Man Is Hard to Find" Flannery O'Connor explores the possibility of transcendence of the absurd realities of the modern world through the religious awakening of the existential paradox.